The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太鼓と女は叩くべし ： 『ラームチャリットマーナス』の女性観
Author(s)	長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 2019, 18, p. 49-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太鼓と女は叩くべし

―『ラームチャリットマーナス』の女性観―

長崎 広子

近年の堅調な経済によってインドは世界の中で確実に地位をあげる一方で、若い女性を標的にした凄惨なレイプ事件は海外メディアでも大きく取りあげられ、インドの負の側面を浮き彫りにしている。では、女性を取り巻く環境としてインドは未だ野蛮な後進国なのだろうか。何をもって比較するかによってそのイメージは大きく変わるが、たとえば日本では女性の総理大臣が未だ誕生せず、その役割を期待される女性閣僚すらいないなか、インディラー・ガーンディーは 50 年以上も前にインドの第５代と第８代首相をつとめて強力な指導力を発揮しており、必ずしもインドの女性の地位が低いと言い切ることはできない。だが限られたセレブリティをのぞけば、一般的には女性に対して古典的な価値観が主流であることは事実である。では、古典的な価値観とは何なのだろうか。小論は、北インドでその価値観の形成の一端を担ってきたと考えられるヒンドゥー教ヴィシュヌ派ラーマ信仰の聖典『ラームチャリットマーナス』（*Rāmacaritamānasa*）における女性の描写を考察し、作品が著された 16 世紀から現代インドに至る北インドの女性観の理解につなげたい。

『ラームチャリットマーナス』への現代的批判

16 世紀の詩人トゥルシーダース（Tulasīdāsa）は、ヒンディー語の東部方言アワディーでラーマ物語『ラームチャリットマーナス』を著し、ヒンディー文学史上最高の詩人と称されるだけでなく、聖者としても崇められている。北インドで『ラーマーヤナ』といえば、サンスクリット叙事詩ラーマーヤナではなくトゥルシーダース版の『ラームチャリットマーナス』をさすほど、北インドの信仰と生活でその影響力は絶大である。魔王ラーヴァナを倒すためにヴィシュヌ神の化身としてこの世に生まれたラーマは、アヨーディヤーを都とするダシャラタ王の息子であり、満月のように欠けることのない完璧なダルマを実践する者として描かれている。全 7 巻 1073 詩節あるこの物語は、シヴァ神がパールヴァティー神妃にラーマ物語を語って聞かせるという枠組みになっており [1]、ラーマの誕生から、シーターとの結婚、継母カイケーイーの陰謀による 14 年間の森への追放、シーター妃がラーヴァナに誘拐され、ラーヴァナとの戦いで勝利をおさめて、ア

[1]ヒンドゥー教の三大神ブラフマーとヴィシュヌとシヴァ神のなかで、シヴァ神とヴィシュヌ神はそれぞれ宗派を形成し、ヴィシュヌ神の化身であるラーマを描いたこの作品『ラームチャリットマーナス』はヴィシュヌ派ラーマ信仰の聖典として知られている。それぞれの宗派の違いがある一方で、この作品では、語り手であるシヴァ神とヴィシュヌ神との関係は互いを尊敬しあい理想的なものである。なお、物語の舞台として描かれ今日ラーマ信仰の聖地となっている場所において主要神格がヴィシュヌ神ではなくシヴァ神である点について、Diana Eck (1991)の興味深い論考がある。

ヨーディヤーへ帰還するまでが描かれている。この作品には息子として、夫として、妻として、あらゆる点で理想的な行動の規範が主要な登場人物をとおして描き出されているとされるが、今日ではこの作品の女性観が批判の対象になっている。たとえば、次の一節がその批判でしばしば引用されるものである。

ḍhola gavāra sudra pasu nārī. sakala tāḍanā ke adhikārī. 5.59.6
太鼓、無学な者、シュードラ、家畜、女は皆、打たれるべし。

この一節をめぐって、カースト差別撤廃や女性の権利の保護を訴える者たちは反発し、この聖典から削除されるべきだと訴える。一方で作品を擁護する者たちの主張によれば、「打つ」が意味するところは、太鼓やこれらの者たちにはラーマ神の教えを受ける権利があることだという。しかし、ラーマからの教訓であるこの一節に特別な解釈があるとは考えにくい。そもそもこの作品には、女性に対する否定的と捉えうる詩節は他にもあり、表 1 は該当する箇所とその日本語訳を示したものである [2]。

表 1

1.57.d1.2	nāri sahaja jaḍa agya.	女性は性質で思慮深くなく、知識がない。
1.120.4.1-4.2 パールヴァティーからシヴァへの言葉	aba mohi āpani kiṅkari jānī. jadapi sahaja jaḍa nāri ayānī.	今や私をあなたの僕と認めてくださいました。 たとえ女で性質において愚かで知識がなくても。
2.27.7.2 カイケーイーに対して	nāricarita jalanidhi avagāhū.	女の性質は、底知れない海である。
2.29.d1.1 ダシャラタ王の自問自答	kavaneṃ avasara kā bhayeu gaeuṃ nāribisvāsa.	女を信じて、このような[大切な]時に何ということがおこったのだろ

[2] 2校訂本によって詩節の数は異なるが、本稿で使用したテキストは Viśvanāthprasād Miśra, ed., 1962, *Rāmacaritamānasa*, Vārāṇasī: Sarvabhāratīya Kāśirāj Nyās である。なお『ラームチャリットマーナス』の詩節は、チャオパーイーが 8 行と二行詩ドーハーが基本となっている。本稿で使用した番号は、2.35.7.2 では第 2 章の第 35 詩節のチャオパーイーの第 7 行目の後半句を、2.47.d1.2 では第 2 章の第 47 詩節の二行詩ドーハーの 2 行目を指す。c はそれ以外の韻律全般を指す chand である。

		うか。
2.35.7.2 カイケーイー妃から夫ダシャラタへの叱責	jani abalā jimi karunā karahū.	か弱い女のように嘆くな。
2.47.7.1-7.2 カイケーイー妃をさして民衆の言葉	satya kahahiṃ kabi nārisubhāū. saba bidhi agahu agādha durāū.	女の性質について詩人は真実を語る。 あらゆる面で計り知れず、底知れず、[謎で]隠れている。
2.47. 8.2 カイケーイー妃をさして民衆の言葉	jāni na jāi nārigati bhāī.	女の行動は理解できない、ああ兄弟よ。
2.47.d1.2	kā na karai abalā prabala kehi jaga kālu na khāi.	か弱い女と言われる強い女にできないことがあろうか
2.161.4.1-4.2	bidhihuṃ na nārihṛdaya gati jānī. sakala kapaṭa agha avaguna khānī.	神さえ女のこころの動きを理解できない。 [女は]あらゆる欺瞞、罪、欠点の蔵である。
4.15.7.1-2	mahā bṛṣṭi caliṃ phūṭi kiārīṃ. jimi sutaṅtra bhayeṃ bigarahī nārīṃ.	女が自由になって堕落するように、大雨で畝は壊れて流れてしまう。
5.37.2.1-2.2	sabhaya subhāu nāri kara sācā. maṅgala mahũ bhaya mana ati kācā.	実に女の性質は臆病である。吉兆の時でも恐れ、心はかたくなである。
5.59.6.1-6.2	ḍhola gavāra sudra pasu nārī. sakala tāḍanā ke adhikārī.	太鼓、無学な者、シュードラ、家畜、女は皆、打たれるべし。
6.16.2.1-3.2	nārisubhāu satya kabi kahahīṃ. avaguna āṭha sadā ura rahahīṃ. sāhasa anṛta capalatā māyā. bhaya abibeka asauca adāyā.	女の性質の真実を詩人は語る。心に８つの欠点が常にある。 大胆、嘘、落ち着きのなさ、迷い、恐れ、無思慮、汚れ、無慈悲。

この表に挙げたように、女性であることがいくつかの悪徳と関連付けられている。女性は性質では「思慮深くなく知識がない」（1.57.31.2）や「愚

かで知識がない」（1.120.4.2）という。当時の女性が教育を受ける機会が一般的になかったことを考慮すれば知識がないとしても、「思慮深くない」や「愚か」という個人の気質を女性全般の性質としている点に違和感を覚える。しかもこの文脈は人間の女性だけでなく、パールヴァティー女神までが夫シヴァ神に自身を卑下して「女」であり「愚かで知識がない」（1.120.4.2）と言っている。つまり女性特有の欠点は、たとえヒンドゥー教の女神であっても逃れられないものであると女神本人が自覚しているのである。ラーマ王子を即位式の直前に森に追放させた継母であるカイケーイー王妃は、この物語の悪役のひとりであるが、誰もが予想しなかった彼女の行動を指してアヨーディヤーの民衆が「女の性質は底知れない海」と非難している。ここでも「底知れない海」はカイケーイー王妃の性質ではなくて「女の性質」であるとされている。また、カイケーイー王妃の要求で息子ラーマを森に追放せざるを得ないダシャラタ王は、女を信じたために大切な時にとんでもないことが起こってしまった（2.29.d1.1）と嘆いているが、ここは女を信じたことを悔やむよりも、カイケーイー個人を非難すべきであろう。極めつけは、ラーマを森に追放することに悩むダシャラタ王を見てカイケーイー妃が放った「か弱い女のように嘆くな」（2.35.7.2）という言葉である。女性であるカイケーイーが男性である王に対して女々しいと言うのであるから、苦笑せざるをえない。そのため、すべてがカイケーイーの思惑どおりに運ぶのを見て、「か弱いと言われる（が、実は）強い女にできないことなどあろうか」とダシャラタ王が考えるのは至極当然と読者は思うだろう。ここまでくると、女性は「大胆、嘘、落ち着きのなさ、迷い 恐れ　無思慮、汚れ、無慈悲」（6.16.3.1-2）であるのだから「女は打たれるべし」（5.59.6.1-2）とされても、仕方がないのではないかと錯覚するようになる。

しかしこの物語には悪女ばかりが登場するわけではない。たとえばラーマの妻シーターは夫ラーマに付き従い森に暮らし、ラーヴァナにさらわれ捕らえられた後も決して彼の誘いにのることはなかった。このような正しい行いをする女性がいても、女はすべて叩かれるべき存在なのだろうか。あるいは、正しい女性は少数で、多くは叩かれるべき者であるのだろうか？これに関連して、ラーマたちが森に追放されていたときに、アトリ聖仙の妻アナスーヤーがシーター妃に語った次の言葉を見てみよう。

> amita dāni bhartā baidehī. adhama so nāri jo seva na tehī. dhīraju dharma mitra aru nārī. āpadakāla parikhiahi cārī. bṛddha rogabasa jaḍa dhanahīnā. andha badhira krodhī atidīnā. aisehu pati kara kie apamānā. nāri pāva jamapura dukha nānā. ekai dharma eka brata nemā. kāya bacana mana patipada premā 3.5.6.1-10.2

> ああシーター妃よ、夫は限りない[幸福を]与えてくれる。彼の世話をしない女は最低である。忍耐、ダルマ、友、女。苦難の時にこの四つは試される。老人、病人、愚者、貧者、盲人、聾唖者、短気、哀れな者、このような夫を嘲ると、女は地獄で多くの苦しみを得る。唯一のダルマで唯一の献身であり決まりは、身体、言葉、心で夫の御足に愛情を注ぐことである。

アナスーヤーによれば、身体的にも精神的にも経済的にもどのような夫であろうとも、夫に尽くすことで女は限りない幸福を得られ、夫への献身が女の唯一のダルマであるという。引き続き、彼女は夫への献身を四種類に分けてさらに詳しく説明している。

> jaga patibratā cāri bidhi ahahīṃ. beda purāna saṃta saba kahahīṃ
> uttama ke asa basa mana māhī. sapanehu āna puruṣa jaga nāhī.
> madhyama parapati dekhai kaise. bhrātā pitā putra nija jaise.
> dharma bicāri samujhi kula rahaī. so nikr̥ṣṭa triya śruti asa kahaī.
> binu avasara bhaya teṃ raha joī. jānehu adhama nāri jaga soī.
> patibaṃcaka parapati rati karaī. raurava naraka kalapa sata paraī.
> chanasukha lāgi janma sata koṭī. dukha na samujha tehi sama ko khoṭī.
> 3.5.11.1-17.2
> 世間で夫への献身には四種類ある。ヴェーダ、プラーナ、信徒はみな語っている。最上の[献身をする女は] 心のなかで夢にも[夫]以外の男がこの世にいるとは考えない。中間[の献身]では他人の男をどのように見るだろうか。それは、自分の兄弟、父、息子のように[見るのだ]。ダルマを考え家を思い生きる女は悪い女とヴェーダは語る。余裕がなく、恐れからそうする者は、この世で最低の女であると知れ。夫をだまし夫以外の男と睦む女は、百カルパの期間叫喚地獄に落ちる。刹那の喜びのために 10 億の生の悲しみ[があること]を理解しない女のように悪い者が他にいようか。

四種類の献身の区分があいまいであるが、最上は夫以外の男がこの世にいると思わないことであり、次には夫以外の男を自分の家族のように扱うことであり、義務感で夫に献身する女は悪い女で、何かに怯えて夫に献身する女は最低だという。夫以外の男性と関係を持つ女は論外で地獄行きとなる。

女性の幸福は夫への献身であると男が女に価値観を押し付けているのではなく、賢夫人アナスーヤーが若妻シーターに教え諭していることは、

こうした考え方がこの作品が著された 16 世紀には一般に理想とされていたことのあらわれであろう。

女は強いのか、それとも弱いのか

一般に女性は男性よりも体力的に劣ることが多い。その点で女性は弱いといえる。だが、ダシャタラ王はカイケーイー妃について「か弱いと言われる（が、実は）強い女にできないことなどあろうか」と考えている。つまり、「女は弱いと言われている」ため、ダシャラタ王は女性に対していたわりの気持ちで接していたのだろう。しかし弱者とされる女から突き付けられた理不尽な要求を退けることができないときに、弱者であることによって守られながら、実は強い女は何でも思いどおりになるのではないかと王は考えたのかもしれない。

たとえカイケーイーが強い女であっても、女は弱いものであると一般に考えられていたことに疑いの余地はない。では弱者であるとするならば、どの点で弱く、何から守られなければならないのだろうか？この物語では、ラーマとシーターの夫婦と弟ラクシュマナが森に暮らしていたときに、ラーマの宿敵ラーヴァナがシーターを誘拐する。体力的にもラーヴァナと戦って身を守ることのできないシーターはなすすべもなくあっさり誘拐されてしまう。妻が魔王に誘拐されることを阻止して守ることこそが夫であるラーマに要求されることであるが、それは果たされなかった。一方でシーターはラーヴァナにさらわれたのちも決して彼の要求を受け入れず、自身の貞操は自分で守っている。この点でシーターという女性は強いといえるが、女性だから強いのではなくて彼女自身が強いのである。いずれにしてもこの作品の信奉者たちなら、シーターのこの強さはアナスーヤーの言うところの夫への最高の献身に支えられていると見るのだろう。

だが著者トゥルシーダースはシーターがラーヴァナにさらわれて貞操を守ったということを万人に納得させるのは難しいと考えたようだ。というのは、ラーヴァナが囮として放った金色の鹿を捕らえに行く前にラーマはシーターの身の安全を考えて、火神アグニに彼女を預ける（3.24.3-4）。その後ラーマが不在のときにラーヴァナにさらわれるシーターは彼女が残した影であり、ラーマがラーヴァナとの戦いに勝利したのち、火神アグニがシーターの影とその汚れを焼きはらい、代わって本物のシーターが現れる（6.109.c1-2）。なお、サンスクリット叙事詩『ラーマーヤナ』として最も有名なラーマ物語であるヴァールミーキ版では、貞操を証明するためにシーターは自ら火に焼かれる試練を受ける。火神アグニが彼女の身の潔白を宣言してシーターが死ぬことはなかったが、ここまでしてもアヨーディヤーの都に戻ったのちに彼女の貞操を疑う者がいると知ったラーマは

ラクシュマナに命じてシーターを森に捨てさせる[3]。著名なヴァールミーキ版でも払しょくできなかったシーターへのこの疑いを『ラームチャリットマーナス』はさらわれていないという設定に変更して物理的に排除したのである[4]。

このように著者トゥルシーダースがこだわったのは、シーターの貞操を守ることであり、それを疑われる可能性のある状況の完全排除である。どんなにシーターの精神力が強くても、夫以外の男性との関係を疑われる状況があってはならないのである。物語の中では夫ラーマがシーターを火神アグニに預けて守っているが、影の設定を選択して物語を展開させた著者トゥルシーダースが本当の意味でシーターを守ったといえる。16 世紀には、真実であろうがなかろうが夫以外の男性との関係を疑われた女は死に値すると考えられていたのだろう。クリシュナ神のように複数の女性と関係を持っても男であれば許される一方で、女性に対する扱いは極めて過酷である。体力差があるため、女が男性等による暴力から自分で自分の身を守ることは難しい。この点でインドでは女は守られなければならない弱い存在と考えられてきたのだろう。

結語

小論では『ラームチャリットマーナス』の女性観を考察してきたが、女性に対する否定的な描写があるからといって著者トゥルシーダースや作品の評価を下げようとしているわけではない。男女平等の意識がなかった時代であり、トゥルシーダースの考えというよりも当時の世相を反映した女性観と捉えるべきであろう。なお、この作品で民衆の圧倒的な支持を得たトゥルシーダースはラーマ信仰の聖者として神聖視されるようになる。興味深いのは、時代が下がるにつれてトゥルシーダースは愛妻家であり恐妻家でもあったという伝承が流布するようになる点である。たとえば、トゥルシーダースの弟子を名乗るベーニー・マーダオ・ダース（Beṇīmadhavadāsa）の著した伝記『上人伝要解』（*Mūla Gosāī-Carita*）のなかでトゥルシーダースは妻を溺愛していたが、骨の上に張り付いた肉体を愛するのではなくて、神への信愛（バクティ）を求めるべきであると妻は諭し、彼は世俗を捨てている。現代の『アマル・チットル・カター』（*Amar Citra Kathā*）のようなコミック本でも同様に、賢夫人の意見に従い人生最大の決断をするトゥルシーダースが描かれている。トゥルシーダースと同時代

---

[3] 森にシーターを捨てさせる物語が含まれる後の巻は後世の挿入とする説がある。

[4] サンスクリットで書かれた『アディヤートマ・ラーマーヤナ』（13-15 世紀）のプロットを借りている。

に描かれた聖者伝[5]にはなかったこのような描写が書き加えられた背景には、『ラームチャリットマーナス』にみられる女性観が作品の偉大さに汚点をつけていると考えられた可能性がある。トゥルシーダースは女性を尊重していたとする聖者伝を新たに創作することによって作品の神聖さを守ろうとする意図があったとのではないだろうか。もしこの推察が正しいとすれば、どの時代からこうした傾向が加速したのかが気になるが、社会や価値観の変化と作品の位置づけについての考察は、今後の研究に譲りたい。なお蛇足かもしれないが、おそらくは 19 世紀後半の作品であると考えられる先述の『上人伝要解』との関連でいえば[6]、イギリスによる植民地化を経てキリスト教宣教師やラーム・モーハン・ローイ等の社会改革運動家の努力によってインドで女性教育が始まった 19 世紀ごろから、『ラームチャリットマーナス』の女性観を問題視する思想的な風潮が徐々に形成されていったと考えられる[7]。

---

5 『信徒列伝』（*Bhaktamāla*, 1600 年ごろ）を著したナーバーダース（Nābhādās）は、トゥルシーダースと同時代の人物であり、彼の著したトゥルシーダースに関する 6 行詩は短いながらも内容において信憑性が高いと考えられている。

6 ベーニー・マーダオ・ダースが『上人伝要解』に記した創作年は 1630 年で、トゥルシーダースの死後 7 年に書かれたことになるが、作品の言語や表現などから、実際は 19 世紀後半の作品ではないかとされている（長崎 2016：23-25）。

7 本論では扱わなかったが、ラーマに一目惚れしたラーヴァナの妹シュールパナカーは勇気を出して彼に告白するが、ラクシュマナによって鼻と耳をそぎ落とされる。シュールパナカーは悪役であるものの、顔を傷つけられるという行為は女性にとって極めて辛いものであり、ラーマとラクシュマナが女性に暴力を振るったという事実は否めない。この点に着目して、Erndl（1991）は『ラームリャリットマーナス』を含めた複数のラーマ物語における当該箇所の描写の比較研究を行い、自身の恋心に正直で自由奔放なシュールパナカーの女性としての魅力を明らかにするとともに、ラーマ物語における彼女に対する不当な扱いに疑問を呈している。

参考文献

長崎広子 2011, 聖者トゥルシーダース伝の変容, 『説話･伝承学』, 第 19 号, pp. 159-78.

2015, ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』（上）, 『印度民俗研究』, 第 14 号, pp. 21-44.

2016, ベーニー・マーダオ・ダース作『上人伝要解』（下）, 『印度民俗研究』, 第 15 号, pp. 37-62.

Eck, Diana, 1991, “Following Rama, Worsiping Shiva” in Diana Eck & Francoise Mallison (eds.) *Devotion Devine: Bhakti Traditions from the Regions of India*, Groningen: Egbert Forsten, pp. 49-71.

Miśra, Viśvanāthprasād, ed., 1962, *Rāmacaritamānasa*, Vārāṇasī: Sarvabhāratīya Kāśirāja Nyāsa.

Erndl, Kathleen M., 1991, “The Mutilation of Śūrpaṇakhā”, Richman, Paula (ed.) *Many Ramayanas: The Diversity of a Narrative Tradition in South Asia*, Berkeley: University of California Press, pp. 67-88.

Śukla, Sudhārānī, n.d., *Gosvāmī Tulasīdās jī kā sāmājik ādarś*, Lucknw, Lucknow University.